

巻頭言

特集 平成が生んだもの、残したものと

KEIO SFC JOURNAL Vol.18 No.1 特集編集委員 / 編集長

清水 唯一朗

慶應義塾大学総合政策学部教授

始まりがあれば終わりがある。30年の時を重ねた平成が終わろうとしている。今さら元号に意義などないという向きもあるだろうが、そうだろうか。懐古趣味は別に措くとしても、元号が持つ時代性は看過できない。元号そのものが意味を持ち、そこにひとびとの営みが積み重なっていくからだ。

その始点となるのは名づけである。名づけという行為は、ひとびとの希望や期待を表す。「内平かに外成る」(『史記])、「地平かに天成る」(『書経])という言葉に想いを込める時代。それが平成のはじまりであった。

その期待とは裏腹に、平成は激動のなかで幕を開けた。ベルリンの壁が取り払われ、冷戦の終結が宣言され、世界は新しい時代へと踏み出した。国内ではバブル経済がはじけ、湾岸戦争では「世界に認められない」苦汁を味わった。その閉塞感を取り払うかのように劇的な政権交代が起こったが、それは定着せず、阪神淡路大震災にはじまる社会不安がオウム真理教の事件によって表出した。平成最初の10年は、元号の意味とは矛盾する日々となった。

続く10年には、いくらかの期待が広がった。小泉内閣が劇場政治を展開するなかで景気は好転し、インターネットの普及によりひとびとは様々な情報を容易に手に入れられるようになった。リーマンショックによる不況は、再度の政権交代をもたらした。変化が新しい価値を生み出し、希望が見出された。昭和、いや、戦後を彩ったさまざまな秩序が限界を迎え、転換していく時期であった。

その転換が歩みだしたところで東日本大震災が起こったことは、どう捉えられるだろうか。政治から見れば、ようやく生じた政権交代が未曾有の国難に際会し、その可能性を失ったという負の評価があるだろう。他方、幾度となく震災に見舞われてきたこの国のひとびとは、むしろ震災を機に大きく脱皮した。大学という、若い生気に溢れる場から見た偏見だろうか。平成最後の10年は、変化を推し進める活力にあふれているように思われる。

平成という時代は、奇しくも SFC が歩んできた道と重なる。1990 (平成 2) 年 4 月に開学したこのキャンパスは、常に未来を志向して進んできた。一度、立ち止まって考えてみてもよいかもしれない。そんなことを考えたのだろうか。前任の編集長から「SFC ならではの平成史を示す特集を組んでほしい」と頼まれたのは、ちょうど 1 年前のことだった。その後、予期せず編集長を引き受けることとなり、今号は異例ながら特集担当を兼ねさせて頂いた。

明治 150 年を迎える今年に、平成の終わりを考えるというのは何とも面白いことだとも思った。なぜなら平成という元号は、明治の直前に元号の案であったからだ。その時、実際に選ばれた元号は「慶應」であった。ならば本誌で取り上げることは自然でさえある。

もっとも、ここは SFC である。特集にあたっては、政治、国際、社会、経営、デザイン、バイオ、芸術と、文理を横断しつつ、キャンパス内で常に前向きな議論を戦わせてきた未来志向の教員に執筆を依頼した。幸い、お声がけしたすべての方から原稿をいただくことができた。個別の論文について要約を記すという愚は避けるが、机上の空論ではない、理論と実践の共存した論文が並んだことは面目躍如の感がある。何より学生との共著論文が二本もあることは、半学半教を掲げる義塾のキャンパスとして誇るべき成果であろう。

SFC の基軸である情報技術分野に関しては、この 3 月に退職された徳田英幸先生に執筆をお願いした。その研究者としての歩みは平成とも SFC とも重なっている。類稀なる研究者、人格者として SFC を牽引してこられた先生の手による論文は、30 年の歩みを辿りながらも未来志向であり、本特集の結びとして相応しいものとなった。先生のこれまでの貢献に記して感謝申し上げたい。

また、各論文を横断する試みとして、本誌としてははじめてとなる座談会を行った。司会には『平成史』の著作がある小熊英二教授を迎え、充実した SFC らしい議論が展開されている。まずはそちらから読み始めていただければありがたい。

昭和という時代の終わりは、大きく日本の政治、文化、社会を変化させた。終わりがはじまりでも言えるだろう。まもなく訪れる平成という時代の終わりは、何のはじまりとなるのだろうか。本号がそれを見据える一歩となれば幸いである。